



片足の生活

先月、ブルガリアへスノーボードに行ってきました。2年ぶりだったので、感覚が戻るまでに少し時間がかかりましたが、3日目には十分なスピードですべれるようになりました。余裕が出てきた4日目の出来事です。同じターンばかりを練習していたので、そろそろ新しいことに挑戦しようと、調子によって雪のコブからジャンプし着地した瞬間、「グキ!!」。鈍い音が体から聞こえました。気がつくと、足首のあたりがズキズキ痛みだし、スノーボードで山を下ることができなくなったため、スキー救急隊に運ばれ、麓にある応急医療クリニックに連れていかれました。X-rayの結果、左足首の骨にヒビが入っていると診断され、悲しくもギブスと松葉杖がホリデーのお土産となりました。

ブルガリアの医者からは、「あと4週間は、松葉杖で生活することになると思います」と告げられました。不幸中の幸いとも言えるべきでしょうか、ホリデーの始めではなく、終わりに怪我をしたということと、4月中はそこまで仕事が立て込んでいなかったということが、せめてもの精神的な救いでした。それでも、走り回らなければならない現場のお仕事は、残念ながらキャンセルせざるを得ない結果になりました。

ロンドンに帰ってきてからののはじめの1週間は、慣れない松葉杖で数分歩くだけでクタクタになり、行きたいところへ簡単に行けないもどかしさと、痛みと絶望でいっぱいでした。「ちゃんと休養したほうがいいよ」と、友人たちからの温かいメッセージを受け取りつつも、「デザインのお仕事は…なんとかできる! 1カ月も休んではられない!」と、自分を追い立てて、デザインのお仕事に集中することにしました。

少しずつですが、松葉杖でリハーサルやミーティングへ行けるようになり、今週はリバプールへ出張したりと、片足での行動に随分と慣れてきました。今まで、あまり気づきませんでした。車椅子の人々が、どれだけ苦勞してロンドン中を通勤しているか、障害者から見たロンドントransポートの改善されるべき点、どれだけの劇場が車椅子のお客を考慮して設計されているのかなど、毎日考えさせられます。公共の設備だけでなく、障害をもつ人に対しての、人の反応も見えるようになりました。99.9%は、電車で座席を譲ってくれますが、稀に嫌そうな顔をして、見て見ぬふりをする人もいることは確かです。そういう人は、きっと心が病んでいるか、私よりも重症なものを抱えているのでしょうか。正

直、こちらのほうが可哀想な気分になります。

日本と違うなと感じたのは(日本で松葉杖を使ったことはありませんが)、人々のちょっとした、思いやりの声かけがよくあることでしょうか。通りすがりの知らない人からいきなり、「早く良くなるといいね!」や、「あら、ロンドンマラソンでコケたの?」というジョークを飛ばしたり、バスで向かい合って座った人に、「どうしたの? 大変ね。何か手伝おうか?」と気軽に話しかけてきてくれる人が多いです。他人への恐怖心というものや、硬いプライバシーの壁があまり感じられないのは、我々日本人がいう“外国人”の強みかもしれません。特に、ヨーロッパやアメリカ人は、そういった軽やかで社交的な人が多いと思います。そのような、社交性や、コミュニケーションのしなやかさは、場の雰囲気や、モチベーションを上げたりと、仕事でもフル活用されている気がします。

片足で、デザインのお仕事をさせていただくだけで、とてもありがたいことです。そんな状況で気づいた点があります。いつもなら、気になった細かい部分は、自分でハシゴに上って直してしまうことがあります。今は物理的に無理です。デザイナーとして、かつこの足でできることは、先を考えながら、テクニシャンに的確な指示出しをすること、ハイデイのある状況に鬱にならず笑い飛ばすこと、客観的に物事を見る余裕をもつこと、機械的な問題に囚われずに、デザインに集中することでしょうか。つまり、柔軟なコミュニケーションと思考なしでは成り立たないお仕事。ハンディがあるろうと、なかるうと、はじめからそういう姿勢で仕事に臨むべきであったし、それこそが照明家の役目である(笑い飛ばすことは除いて…またはいっそうのボーナス)と、今更ですが思った次第です。



ロンドン中心部で、駅ホームまで段差なしでアクセスできる駅はまだ少ない